個別論文

8本の詩にみる中世ヴァルド派の教理
――「悔悛の奨励」を中心に――[1)]

有田　豊

Abstract

This study is about the doctrine of the medieval Waldenses, a Christian group founded in Lyon in 1173. The Waldenses are known for producing eight poems in the 14th to 16th centuries. The central theological topic in these poems is "repentance", and the previous research identified this element in three of these poems, *the Noble Lesson*, *the Bark*, and *Prayer*. This study focuses on the other five poems, *the New Comfort*, *the Scorn of the World*, *the New Sermon*, *the Eternal Father*, and *the Gospel of the Four Seeds*, to further identify their relationship with repentance. The results indicate that the four of these poems include the element of repentance, but *the Gospel of the Four Seeds* lacks it, and unclear about its relationship to repentance. This study contributes to understanding the shared belief and doctrine of the medieval Waldenses.

キーワード：ヴァルド派，キリスト教，悔悛，中世写本，ロマンス語文献学
Keywords : Waldenses, Christianity, repentance, medieval manuscripts, Romance philology

Ⅰ　はじめに

本稿で扱うヴァルド派とは，1173年頃にリヨンの裕福な市民ヴァルドによって創設された，キリスト教の一派を指す。同派は，ラテン語で書かれた聖書を俗語に翻訳して，その内容を文字通りに解釈・実践し，常に聖書に忠実であることを第一とする聖書中心主義の特徴を持つとされる。ヴァルドとその信奉者たちは，聖書に忠実に従う立場からカトリック教会の権威を否定したため，1184年に異端と宣告され，後に教会から破門された。以後，約350年間にわたって地下活動を展開した彼らは，1532年に宗教改革運動に参加し，今日では改革派系プロテスタントの一派として活動を続けている。

中世期のヴァルド派（以下，中世ヴァルド派と表記）は，自らの信仰に関する様々な文書を作成したことで知られている。約180本の文書が現存しており[2)]，その中には14世紀末から16世紀前半にかけて執筆された8本の詩が含まれている。8本の詩は，『崇高なる読誦』，『舟』，『4つの種の福音』，『祈祷』，『現世の蔑視』，『永遠なる父』，『新たなる救慰』，『新たなる説教』と題され，イタリアとフランスの国境にまたがるコッティエ・アルプス地域で使用されていた古オック語で綴られている[3)]。これらの詩が収められた写本は3つ現存しており，保管されている場所

にちなんでケンブリッジ写本，ジュネーヴ写本，ダブリン写本と呼ばれている。19 世紀後半から校訂版の編纂が始まり，20 世紀以降，内容の詳細な分析が行われるようになった。中でも『崇高なる読誦』は，ヴァルド派の起源や教理を理解するために有効な史料として，長らく注目されてきた。一方で，他の７本の詩に関しては比較的研究が少なく，詳細な内容分析がほとんど行われてこなかった。しかし，『崇高なる読誦』のように，もし中世ヴァルド派が自らの教理を詩の形式で表現していたとすれば，他の７本の詩にも教理的な要素が含まれている可能性が高いと考えられる。

この観点から先行研究を紐解くと，８本の詩に含まれる教理的な要素を分析したものとして，フォーゲルの研究が挙げられる。彼によると，８本の詩には「悔悛の奨励」という神学上の中心的なテーマが含まれているという[4)]。悔悛とは，過去に犯した罪や過ちを認識し，後悔や反省を通じて生活や行動を改め，罪から離れる意志を表す宗教的・道徳的な概念である[5)]。カトリック教会では悔悛を「告解の秘跡」と称し，犯した罪を聴罪司祭の前で告白して，罪の赦しを求めることを重視している。中世ヴァルド派でも同じく，罪の告白とその赦しを求めることを奨励していた。しかし，フォーゲルの研究において，悔悛の奨励との関連性が明確に示されている詩は，８本のうち『崇高なる読誦』，『舟』，『祈祷』の３本のみであり，残る５本との関連性については不明である。ただ，もし悔悛の奨励が８本の詩における神学上の中心的なテーマであるなら，残る５本の詩にも同様の関連性が見いだせるはずである。その関連性を明らかにできれば，フォーゲルの研究の妥当性を検証し，悔悛について８つの詩それぞれが持つ意味を深く探るための手がかりが得られる。さらに，フォーゲルの研究を出発点として８本の詩の詳細な解析を進め，信者たちが共有していた教理の一端を解明できれば，中世ヴァルド派が持つ信仰体系の包括的な理解にも繋がっていくことが期待される。これらの点に，本研究の学術的意義が含まれているといえよう。

そこで本稿では，中世ヴァルド派が遺した８本の詩のうち，先行研究において言及されていない５本の詩『新たなる救慰』，『現世の蔑視』，『新たなる説教』，『永遠なる父』，『4 つの種の福音』を分析し，各作品と悔悛の奨励との関連性を明らかにすることを目的とする。分析の結果，５本のうち『新たなる救慰』，『現世の蔑視』，『新たなる説教』，『永遠なる父』の４本には悔悛についての記述が含まれており，悔悛の奨励との関連性が判明したが，『4 つの種の福音』にはその記述がなく，悔悛の奨励との関連性が不明であることが明らかになった。

本稿では，次のような流れで分析と考察を進めていく。まず，中世ヴァルド派の詩に関する研究背景の俯瞰と先行研究の整理を行ったのち，８本の詩に含まれる悔悛に関する記述を分析し，各作品と悔悛の奨励との関連性について考察する。

Ⅱ　先行研究の整理と問題の所在

1　中世ヴァルド派の詩

中世ヴァルド派の詩は，14 世紀末から 16 世紀前半の間に執筆された韻文作品である[6)]。中世ヴァルド派は，教会から破門された後，13 世紀から 14 世紀にかけて少しずつ組織を構築し，内部に説教師と一般信者という２つの立場を設けるようになった[7)]。説教師たちは，ヨーロッパ各

地を遍歴しながら説教を行い，組織の拡大を図った。しかし，それを取り締まる異端審問官の眼が厳しくなると，彼らは公の場での説教が困難となり，一般信者たちと共にアルプスの山中への隠遁を余儀なくされる。同時に，彼らの説教の用途も「他者をヴァルド派に改宗させる」という外向きのものから，「自分たちの信仰を保持する」という内向きのものへと変化していった。以後，説教師たちは一般信者に向けて説教を行いつつ，自分たちの信仰に関する様々な文書を作成するようになった。本稿で取り上げる 8 つの詩は，このような背景の中で生み出されたものである。

表 1　中世ヴァルド派の詩・作品一覧[8)]

作品名	成立時期	行数	概要
『崇高なる読誦』 *La Nobla Leyczon*	14 世紀末 ～ 15 世紀初頭	485 行（G, D） 492 行（C）	教理書的作品。終末の接近，聖書の歴史書部概観（旧約・新約），イエスの教え，イエスの生涯と活動，堕落したキリスト者たち，神が与えた掟などについて記されている。
『舟』 *La Barca*	15 世紀初頭	331 行（D） 333 行（C） 337 行（G）	教理書的作品。2 部構成で，第 1 部にはロタリオ・ディ・セニ著『現世の蔑視』の部分翻訳が記され，第 2 部には人間を「舟」に，現世を「海」にたとえて，現世における人間の行いとそれに付随する死後の行き先が記されている。
『4 つの種の福音』 *L'Avangeli de li quatre semencz*	15 世紀半ば	300 行（G, D）	説教書的作品。『ルカによる福音書』第 8 章 4-15 節に含まれる「種を蒔く人」（4 つの種が出てくる）のたとえ話が，詩の形式で言い換えられている。
『祈祷』 *Oraczon*	15 世紀半ば	94 行（D）	祈祷書的作品。神に直接向けた罪の告白であり，悔悛者は神の掟に背いたことや，隣人に対して罪を犯したことについて赦しを乞うている。
『現世の蔑視』 *Lo Despreczi del Mont*	15 世紀末	115 行（G, D）	教理書的作品。永遠の罰に対する不安から，人生の儚さや財産の無価値について述べ，現世における善行と悔悛の必要性を説いている。なお，『舟』に含まれる『現世の蔑視』と同じ書名だが，内容は異なっている。
『永遠なる父』 *Lo Payre Eternal*	15 世紀末	156 行（G, C） 158 行（D）	祈祷書的作品。三位一体をモチーフとした 3 行× 3 連の繰り返しによって構成される連祷で，自身の魂が浄化され，父なる神と自身とが完全に一なる存在になれるよう願っている。
『新たなる救慰』 *Lo Novel Confort*	16 世紀初頭	299 行（G, D） 300 行（C）	教理書的作品。俗世を離れ，艱難辛苦を耐え忍びながら神に仕えることへの奨励が説かれており，良き羊飼い（キリスト）が与えてくれる「命の泉」の水を通して，人は大いなる救慰が得られるという。
『新たなる説教』 *Lo Novel Sermon*	16 世紀初頭	408 行（G） 437 行（C） 444 行（D）	教理書的作品。財産や快楽への愛は死後の苦難をもたらす原因となるため，現世とそこにある悦びから離れることへの奨励と，どのような者が地獄に堕ちるのかを説いている。

中世ヴァルド派の詩に関する研究が始まったのは，20 世紀初頭である[9)]。以来，先行研究では『崇高なる読誦』の分析に焦点を当てる傾向があった。その理由は 2 つあり，1 つは 19 世紀後半にヴァルド派の起源を特定する根拠として『崇高なる読誦』の成立時期が注目されるようになったこと[10)]，もう 1 つは『崇高なる読誦』が中世ヴァルド派の教理を理解するために有効な史料とみなされるようになったことである[11)]。そのため，『崇高なる読誦』のみ単独で校訂と分析が行われるようになり，他の 7 本の詩とは異なる位置づけとなっていった。したがって，『崇

高なる読誦』に関する分析は比較的進展しているものの，他の７本の詩に関する分析は，ほとんど行われていないのが現状である。

こうした状況下で，『崇高なる読誦』を分析した先行研究としては，モンテ[12]，ボジオ[13]，デ・ステファノ[14]，パピーニ[15]，などが挙げられる。また，他の７本の詩を分析した先行研究としては，シャイター[16]，フォーゲル[17]，が挙げられる。これらのうち，2024年現在の時点では，パピーニとフォーゲルの研究が，中世ヴァルド派の詩に関する最新の成果といえるだろう。

2　先行研究の成果

パピーニとフォーゲルの研究成果とは，具体的にどのようなものか。パピーニは『崇高なる読誦』に含まれる教理を項目別に分析し，フォーゲルは８本の詩に関連する４つの要素を抽出している。

パピーニによると，『崇高なる読誦』に含まれる教理は，次のように要約できる。中世ヴァルド派は，偶像崇拝，殺人，婚外の肉体関係，虚偽や裏切り，不正な金銭取引，吝嗇，離婚，宣誓，復讐などを禁じつつ，貞操を守り，悪人に対して施しや祈り，赦しを奨励しており，聖書に書かれていないカトリック神学の概念である「煉獄」を否定していた[18]。これらの教理は，全て聖書の文字通りの解釈に基づくものである[19]。ヴァルド派はカトリック教会から「異端」とされた集団であるが，元々は教会内部で起こった教会改革運動の一種であり，彼らの教理はカトリック教会のそれに基づいていた。したがって，『崇高なる読誦』に含まれる教理からは，ヴァルド派が聖書およびカトリック教会の教理に根ざした信仰を持っていたことが読み取れるのである。

フォーゲルは，パピーニのような項目別の教理の分析を行ってはいないものの，代わりに８本の詩に関連する４つの要素を抽出している。その要素とは，①最後の審判前における現世での生き方の提案，②カトリック教会が「異端」とみなした対象への迫害に対する批判，③現世における肉体的快楽を避ける姿勢と精神的価値を重視する立場，④最後の審判における神からの救済を追求する悔悛の推奨，である[20]。これらの要素には，ゴネットらが先に提唱した中世ヴァルド派の詩における特徴（悲観的な人生観，地獄の苦しみを回避するための現世における誘惑の忌避と悔悛の奨励，迫害に対する忍耐の必要性）とも共通する点がある[21]。さらにフォーゲルは，ヴァルド派の詩における神学上の中心的なテーマは「悔悛の奨励」であると指摘し[22]，これが人類を救済へと導く過程や救済の可能性をめぐる15世紀の教会論と密接に関係していると述べている[23]。

3　解決すべき問題

フォーゲルの研究を整理すると，４つの要素と関連する作品は，それぞれ表２のようになる。

表２　４つの要素と関連する作品[24)]

要素	関連する作品
①最後の審判前における現世での生き方の提案	『崇高なる読誦』 『新たなる救慰』
②カトリック教会が「異端」とみなした対象への迫害に対する批判	『崇高なる読誦』 『4つの種の福音』 『新たなる救慰』 『新たなる説教』
③現世における肉体的快楽を避ける姿勢と精神的価値を重視する立場	『舟』 『新たなる救慰』 『新たなる説教』
④最後の審判における神からの救済を追求する悔悛の奨励	『崇高なる読誦』 『舟』 『祈祷』

中世ヴァルド派の詩における神学を包括的に分析することは困難を伴うため，フォーゲルの分析も部分的なものに留まっている。そして，彼が指摘する４つの要素のうち，悔悛の奨励との関連性が示されている作品も，『崇高なる読誦』，『舟』，『祈祷』の３本に限定されており，残りの５本との関連性は明らかにされていない。さらに，残りの５本のうち『永遠なる父』と『現世の蔑視』の２本については，どの要素との関連性も示されておらず，彼の分析対象から完全に除外されてしまっている。ただ，もし悔悛の奨励が８本の詩における神学上の中心的なテーマであるなら，『永遠なる父』と『現世の蔑視』を含む残りの５本の詩にも同様の関連性が含まれている可能性が高いと考えられる。それが解明できれば，フォーゲルの研究の妥当性を検証し，中世ヴァルド派における悔悛の概念の重要性や悔悛について各作品が持つ意味を深く探る手がかりが得られるだろう。これを前提に，次章では，８本の詩に含まれる悔悛に関する記述を分析し，各作品と悔悛の奨励との関連性について考察していく。

Ⅲ　８本の詩における悔悛

１　３本の詩における悔悛

まず，フォーゲルが取り上げた『崇高なる読誦』，『舟』，『祈祷』に含まれる悔悛に関する記述を分析しておく。なお，引用文は，全て筆者が古オック語原文から和訳したものである。

(1)　『崇高なる読誦』

『崇高なる読誦』において，フォーゲルは２つの関連箇所を取り上げている。１つめは病人が司祭から不適切な方法で赦しを求める箇所，２つめはカトリック教会とは異なる悔悛の考え方に関する箇所である。

１つめの箇所では，死の淵にある病人が司祭を求め，悔悛を行おうとしている。その際，病人は多少の賃金を支払うことで，自身が生前の罪を悔い改めたかどうかにかかわらず，すぐに赦しを与えてくれるよう聖職者に催促する。しかし，金銭的な取引を介した赦免の授受は教会法によって禁じられているため，金銭的に赦しを得た病人は不正に悔い改めさせられているとい

う。

もしその人［病人］が他者から搾取した100ないしは200リーヴルを持っていても，
100スーほど支払えば司祭は罪を赦し，
100スー以上持っておらず，より少ない場合であっても，
その人に説諭を与えては，赦しを約束するのである。
その人は，自身と両親に対するミサを行うよう子どもに求めなければならず，
司祭は，彼らが正しくても，罪があっても，赦しを約束する。
〔…〕
だが，司祭が過ちを犯した人々は，不正に悔い改めさせられており，
その人は，不正に基づく赦免の儀式に騙されていることになり，
その人に赦しを信じ込ませた人々も，大罪を犯したことになる[25]。

これについてフォーゲルは，大罪を犯した司祭による悔悛の儀式は効果がないとする「秘跡の人効論」を重視したドナトゥス主義の概念がヴァルド派内に認められると指摘しており，不正な悔悛を提供する罪深い聖職者たちによって，教会のシステムが矛盾を含んだものになっていると説明している[26]。

２つめの箇所では，カトリック教会とは異なる悔悛の考え方が展開されている。それは「神のみが赦しを与えることができる」という確信である。

シルウェステルから今日に至るまでの，あらゆる教皇，
あらゆる枢機卿，あらゆる司教，あらゆる修道院長，その全員が，
罪を赦したり，赦免したりできる能力を持ってはいない。
あらゆる被造物に対して，たった１つの大罪さえも赦せないのだ。
神のみが赦しを与えることができ，他者はそれができないのである[27]。

ヴァルド派における悔悛は，「罪の赦し」の授受という点において，カトリック教会のそれとは異なっている。カトリック教会では，儀式を通して，司祭が悔悛者に赦しを与えることができる。一方，ヴァルド派では，説教師が悔悛者に赦しを与えることはなく，「もし汝が本当に自分の罪を悔い改め，再び罪を犯さなければ，悔悛は為され，汝は救われるだろう」という悔悛の成立条件を示すのみに留まっていた[28]。つまりヴァルド派は，罪の赦しに対して人的な関与を認めておらず，赦しを与えることができるのは神のみと信じていたのである。これは『マタイによる福音書』第６章12節で，山上の説教を行うイエスが神に直接宛てた祈りの方法を弟子や群衆たちに教える場面と繋がる。人の罪を裁くことができるのは神のみであり，人の罪を赦すことができるのも神のみなので，罪の赦しは人を介してではなく，神に直接求めなければならないのである。

(2) 『舟』

『舟』においては，末尾に悔悛の儀式の手順と儀式中に唱えるべき文言が示されているという[29]。

汝が聴罪司祭の前に座す時，次のように述べよ。
「罪人である私は，神とあなたの前にやってきました，
私が自身の罪を，正しく，真に贖えるよう，
善良な助言と真の悔悛を私にお与え下さいますように」と[30]。

悔悛の儀式では，悔悛者が自らの膝をつき，両手を合わせながら自身が犯したあらゆる罪を告白し，決められた文言を唱えなければならない。そして，自らの罪を二度と犯さない決意をし，聴罪司祭から与えられた助言を守ることが重要だと教えられる。上記引用においても，聴罪司祭は助言と悔悛の機会を与えるのみで，罪の赦しを与えてはいないことがわかる。

(3) 『祈祷』

『祈祷』においては，悔悛者が神に罪の赦しを求め，それが決定的な救いの媒体として理解されているという。これについてフォーゲルは，悔悛との関連箇所を特定しておらず，引用も示していない。筆者の判断で関連箇所を挙げるとすれば，末尾にある次の一節が示唆的だと考えられる。

主よ，私をお赦し下さい，そして私に猶予をお与え下さい，
現世において悔い改めることができますように，
そして，私に恩寵をお与え下さい，これから先，
私が悪行を大いに憎み，二度とそれをしませんように[31]。

神に向けて直接悔悛を行い，赦しを求めている点は，『崇高なる読誦』に含まれる「神のみが赦しを与えることができる」という確信を裏付けるものといえるだろう。

2　5本の詩における悔悛

続いては，フォーゲルが取り上げていない『新たなる救慰』，『現世の蔑視』，『新たなる説教』，『永遠なる父』，『4つの種の福音』に含まれる悔悛に関する記述を分析していく。

(1) 『新たなる救慰』

『新たなる救慰』には，悔悛に関する記述が4つある。まず，作品の劈頭で，悔悛の方法を知っていても，その実践を避けている「俗世に従う人々」の姿が描写されている。

多くの人は，大いなる無知によって俗世に従っており，
無信仰なままで，神を知らないのである。

彼らは，動物のような態度で，俗世の道を歩んでいき，
神に仕えることも，真の悔悛をすることも，知らないのである[32]。

彼ら［多くの人］は心の中で言う。汝は滅びることはないだろうし，
信仰を知っているのだから，悪い結末を迎えることもない。
今は現世を放棄することができなくとも，
年老いてからは，神に仕えることができるだろう。
しかし，判決の日が来てしまうと，
彼らは自身の無知を理由に弁解することはできないだろう，
彼らは悔悛の方法をよく知ってはいるが，
自身の不注意のために，それに従おうとはしないからである[33]。

俗世に従う人々の特徴が描写された後は，悔悛の方法に関する説明が進められる。そして，俗世における生き方とは対照的に，真摯に悔悛を実践する人々の姿が明示されている。

苦悩，殉教，迫害といった，
全ての艱難辛苦を耐え忍び，
よく悔い改めて真の悔悛を行い，
悪魔とその誘惑に用心することだ[34]。

こうした人々［高貴なる身分の人々］は，幸福で，悪意がなく，
謙虚で，正直で，純潔で，善良な態度であり，
神の力によって新たに生まれかわった後に，
キリストの掟を守りながら，真の悔悛を行うのである[35]。

『新たなる救慰』は信者に宛てた書簡の形式で，現世における苦難と試練に耐え，真の悔悛を行い，神への奉仕を奨励する作品である。その中で「悔悛する人」と「悔悛しない人」という異なるタイプの信者を対比しながら，「悔悛する人」の態度を奨励している。さらに同作品は，神から救慰を受ける方法として，悔悛を特に強調している。これらの点に，悔悛の奨励との関連性が読み取れるだろう。

(2)　『現世の蔑視』

『現世の蔑視』には，悔悛に関する記述が２つある。１つめは現世における平時の悔悛を奨励しており，２つめは悔悛を怠った者が直面する結末を示している。

我々は死を眼前にしてキリストと契約を結ばなければならない，
ここで，死の時に慈悲を見出すことを願う者や
死の時まで契約を結ぶことを待つ者は，

危うい状態で主の御前に出ることになるだろう。
汝がここ［現世］にいる間に，実りある悔悛をせよ。
さすれば，神との調和を得ることだろう[36]。

1つめは，『崇高なる読誦』に登場する，死の淵にある病人の悔悛の儀式とも関係する箇所である。死の時に悔悛を行うのではなく，日頃から悔悛を行っておくことで，罪深い状態で死を迎える危険性を確実に回避でき，死の間際に慌てて金銭的な取引を介した赦しを求める必要がなくなるのである。この箇所は，現世における悔悛の実践を促進していると解釈できるだろう。

「霜を恐れる者にとっては，雪が重荷となる」
汝らも気をつけよ，罪の中で凝り固まってしまい，
昼夜問わずその中で自身を休めているということに。
ヨブが言いたいのは，このように
ほんの短い間の悔悛すらしない者は，
いかなる合意によっても逃れることのできない
地獄の苦しみを受けなければならないということだ[37]。

2つめは，罪深い状態に陥り，悔悛を怠った者が，最終的に地獄の苦しみを経験するという箇所である。「ほんの短い間の悔悛すらしない」という表現は，悔悛の実践がいかに重要であるかを示しており，悔悛をしないことによる罰の重さが「地獄の苦しみ」に喩えられていることから，その不可欠性が強調されている。『現世の蔑視』は，現世における様々な誘惑に惑わされず，真摯に悔悛を実践することの必要性を説いた作品である。このタイトルが示す通り，短時間の悔い改めという特別難しくはないはずの行為すらできなくなるほど世俗的なものに囚われることへの危険性に関する警告を内包していると考えられ，ゴネットらが提唱した「地獄の苦しみを回避するための現世における誘惑の忌避と悔悛の奨励」という考え方とも一致していることから[38]，悔悛の奨励と密接に関連しているといえよう。

(3) 『新たなる説教』

『新たなる説教』には，悔悛に関する記述が1つある。それは『現世の蔑視』に含まれる内容と同じく，悔悛を怠った者が直面する結末を示している。

ゆえに，健康なときに，肉体に対して摂生をせず，
罪を雪ぐための悔悛をせず，
神がお命じになった禁欲さえも遵守しないような
人間は全て狂っており，大いなる悪に目覚めるのである[39]。

上記引用では，悔悛を怠った結果として，個人が「大いなる悪」に向かって狂気の度合いを深めていく様子が示されている。これは，悔悛や禁欲を無視する行為が罪の増加に繋がるとい

う警告であり，道徳的混乱の状態に陥る可能性を示唆する教訓といえる。この観点から『新たなる説教』は，『現世の蔑視』と同様に悔悛の価値とその重要性に関する教えを含んだ作品と位置付けられ，悔悛の奨励とも関連していると判断できるだろう。

(4) 『永遠なる父』

『永遠なる父』には，悔悛に関する記述が１つある。それは『祈祷』と同じく祈りの文言で，悔悛者が神に対して罪の赦しを求める様子が確認できる。

> 慈悲と大いなる救慰に富める者よ，
> 汝の御子を信じる者に真の赦しを与え，
> 苦難における忍耐を終わらせて下さい[40]。

上記引用で言及されている「真の赦し」は，「真の悔悛」と結びついている。この赦しは，真摯な悔悛の結果として神から与えられるものであり，そのためには「真の悔悛」が不可欠である。神に対して直接悔悛を行い，赦しを求める態度は，『崇高なる読誦』に含まれる「神のみが赦しを与えることができる」という確信を裏付けるものであり，『祈祷』における祈りの形式とも一致していることから，悔悛の奨励と関連していると判断できるだろう。

(5) 『4つの種の福音』

『4つの種の福音』は，５本の詩の中で悔悛との関連性が見られない唯一の作品である。この作品では，聖書に登場する「種を蒔く人」の故事を通じて[41]，神の言葉を聞き，それを自身の内に根付かせ，実践するという模範的な人物像を紹介している。「種を蒔く人」の故事では，道端，石の間，茨の中，そして良い土壌という４つの異なる場所に種が蒔かれる。最初の３つの場所では，種が鳥に食べられたり，発芽しなかったり，十分に成長しなかったりしたが，良い土壌では多くの実を結んだ。ここでいう種は「キリストの言葉」，種が蒔かれる場所は「キリストの言葉を聞く人」を象徴しており，キリストの言葉がどれくらい人の心に根付き，効果的に実を結ぶかは，それを受け取る人の態度に依拠することを示している。『4つの種の福音』には，悔悛の奨励に関連する直接的な記述は含まれておらず，悔悛という観点からみれば，８本の詩の中に本作品が含まれている理由は不明である。推測の域を出ないが，この作品が含まれている理由は，神の言葉に耳を傾け，悔悛の儀式で得られる助言を自身の内なる世界に根付かせ，真の悔悛を実現する者とはどのような人物なのかという悔悛者の理想像を示し，他の７本の詩に含まれる悔悛の本質やその価値について深く考えさせる効果を狙った結果なのかもしれない。これについて，より妥当な結論を得るには，別途詳細な調査が必要である。

3　８本の詩と悔悛の奨励の関連性

最後に，これまで行ってきた分析を元に，８本の詩と悔悛の奨励との関連性について考察する。

改めて確認しておくと，フォーゲル曰く，中世ヴァルド派の詩における神学上の中心的なテーマは「悔悛の奨励」である。しかし，彼が分析していない５本の詩における悔悛に関する記述

を分析した結果，『新たなる救慰』，『現世の蔑視』，『新たなる説教』，『永遠なる父』の4本には悔悛に関する記述が確認できる一方で，『4つの種の福音』にはそれが確認できなかった。したがって，悔悛の奨励は，8本全ての詩において一貫して説かれているものではなく，5本の教理書的作品と2本の祈祷書的作品においては説かれているが，1本の説教書的作品においては説かれていない要素だといえよう。

5本の教理書的作品では，救済に関する考え方や悔悛に向けて取るべき行動が示されている。具体的には，『崇高なる読誦』では「悔悛の儀式における人効論（ドナトゥス主義）」や「カトリック教会とは異なる悔悛の考え方」が取り上げられ，『舟』では「悔悛の儀式の手順」と「儀式中に唱えるべき文言」が示され，『現世の蔑視』では「現世における平時の悔悛の奨励」と「悔悛を怠った者が直面する結末」が示されている。同様に，『新たなる救慰』では「悔悛する人と悔悛しない人それぞれの特質や姿」と「悔悛の方法に関する説明」が示され，『新たなる説教』では「悔悛を怠った者が直面する結末」が示されている。そして，2本の祈祷書的作品『祈祷』と『永遠なる父』では，悔悛に臨むための具体的な祈りの文言が示され，一般信者の誰もが悔悛の儀式において同じ祈りを実践できるよう形式が整えられていることが伺える[42]。

中世ヴァルド派の詩には，善悪の区別や救済のための行動指針を繰り返し述べる傾向がある。これは，信者たちが現世で守るべき行動や避けるべき事物などを強調し，それを彼らの記憶に定着させることが意図されていたからだと考えられる。中世ヴァルド派は，聖書を中心とする各種テクストが彼らの活動の中心にあり，「テクスト共同体」と呼ばれるテクストに基づく理念や行動規範を共有する特徴を持つ集団であった[43]。そして，説教師が信者に口頭で教えを伝え，共有し，暗記させるという口承文化を有していた[44]。実際，13世紀のフランチェスコ会司祭アウクスブルグのダヴィッドによる著作『異端審問録』によれば，当時のヴァルド派は教育的な目的で，一般信者に教えを定着させるために，いくつかの「リズムが付されたテクスト」を作成していたという[45]。詩においては，紡がれる言葉がリズムや音韻と結びつくことで，聞き手の心や記憶に残りやすいという効果が生まれる。ヴァルド派の説教師は，難解なラテン語ではなく平易な俗語を使用し，詩の形式に基づいて説教を行った。そのため，一般信者たちは教えの内容を理解し，記憶しやすくなったものと推察できる。このように中世ヴァルド派は，信者同士が容易に理解できる俗語を用い，詩の形式で悔悛についての考え方や現世での行動，具体的な祈りの文言などを示すことで，信者全員が等しく悔悛を実践できる環境を整えていたのではないだろうか。実際に詩の形式に基づいて悔悛の儀式を行っていたかどうかは検証が難しいものの，中世ヴァルド派の詩が信者全体における悔悛の実現を奨励するための「典礼書」のような機能を果たしていた可能性は，十分に考えられるのである。

Ⅳ　結論

本稿では，中世ヴァルド派が遺した8本の詩のうち，先行研究において言及されていない5本の詩『新たなる救慰』，『現世の蔑視』，『新たなる説教』，『永遠なる父』，『4つの種の福音』を分析し，各作品と悔悛の奨励との関連性を明らかにすることを目的としてきた。分析の結果，5本のうち『新たなる救慰』，『現世の蔑視』，『新たなる説教』，『永遠なる父』の4本には悔悛に

ついての記述が含まれており，悔悛の奨励との関連性が判明したが，『4つの種の福音』にはその記述がなく，悔悛の奨励との関連性が不明であることが明らかになった。

この結論を踏まえ，今後の研究における課題を４つ述べておく。１つめは「多様な表現上の特性の指摘」である。本稿では，中世ヴァルド派の詩における悔悛の要素の有無を分析したが，フォーゲルと同じく，その結果は表面的なものに留まっている。しかし，『新たなる説教』の引用部分を見ると，「摂生」や「禁欲」といったキーワードが「悔悛」という精神性に結びついていることがわかる。そのため，今後は詩における多様な表現上の特性も考慮し，各作品に含まれる悔悛の奨励をさらに掘り下げて分析する必要がある。２つめは「他の３つの要素の分析」である。フォーゲルが抽出した８本の詩に関連する４つの要素のうち，本稿では「④最後の審判における神からの救済を追求する悔悛の奨励」以外の３つの要素については検討を行うことができなかった。そのため，今後はこれら３つの要素についても考察を進めていく必要がある。３つめは「『4つの種の福音』が持つ意義の解明」である。悔悛という観点からみれば，『4つの種の福音』が一連の詩に含まれている理由は不明である。しかし，同作品が悔悛者の理想像を描いている可能性が考えられる。また，悔悛以外の観点からみると，一連の詩において同作品が持つ特徴が浮かびあがる余地が残されている。そのため，『4つの種の福音』に関しては，別途詳細な調査が必要である。４つめは「８本以外の詩の存在の裏付け」である。アウクスブルクのダヴィッドの記録にある「いくつかのリズムが付されたテクスト」を考慮すると，本稿で取り上げた８本の詩以外にも中世ヴァルド派の詩が存在した可能性がある。そのため，現存する８本以外にも悔悛に関連する詩が存在したのか，悔悛以外に詩の形式で伝えられた教理はどのような内容だったのかについても検討が必要である。

８つの詩は，合計すると2,000行を越える長さになるため，１本の論考でその全てを分析するには限界がある。したがって，中世ヴァルド派の詩の全容を解明するには，作品ごとの詳細な分析が必要であり，さらなる紙幅が求められる。今後の調査を通じて，中世ヴァルド派が作成した様々な文書において詩が果たしていた役割を理解し，説教師が信者の記憶に刻み込もうとしていた教理の内容を解明することができれば，彼らの間で広く共有されていた思想が明らかとなる。そして，中世ヴァルド派という集団が有していた信仰体系について，より広い視点から分析することが可能になるだろう。

注

１）本研究は，JSPS科研費JP19K13152の助成を受けたものである。

２）Gonnet, G., & Molnár, A.（1974）. *Les vaudois au moyen-âge*. Torino: Claudiana, 322. 中世ヴァルド派写本の種類と内容については，同書の « La littérature vaudoise »（319-370）および « Appendice I-III »（443-454）にまとめられている。

３）各作品の内容は，次の文献で簡潔に紹介されている。Cf. Borghi Cedrini, L., & Giraudo, A.（2022）. Ancient Waldensian Literature. In Benedetti, M., & Cameron, E.（Ed.）, *A Companion to the Waldenses in the Middle Ages*（459-477）. Leiden: Brill.; Vogel, L.（2018）. A Noble Lesson: The Poems of the Early 16th Century Waldensian Manuscripts. In Nicák, M.（Ed.）, *Poetry and theology*（127-145）. Jihlava: Jan Keřkovský.; Papini, C.（2003）. *La nobile lezione ; La Nobla Leiçon : Poemetto medievale valdese*. Torino: Claudiana, 18-27.; Gonnet., & Molnár. *op.cit.* 327-336.

4）Vogel. *op.cit*. 141.

5）大貫隆ほか編（2008）.『岩波キリスト教辞典』, 岩波書店 , 443-444. 木寺廉太訳（2017）.『オックスフォード キリスト教辞典』, 教文館 , 172-173.

6）Gonnet., & Molnár. *op.cit*. 328.

7）以下，中世ヴァルド派の組織構築の変遷に関しては，Audisio, G.（2001）. L'organisation de la clandestinité vaudoise. In Audisio, G.（Ed.）, *Religion et exclusion, XIIe-XVIIIe siècle*（61-70）. Aix-en-Provence: Presses de L'Université de Provence. を参照。

8）Vogel. *op.cit*. 129-130. を参考に，筆者作成。「行数」の項目において，（C）はケンブリッジ写本，（G）はジュネーヴ写本，（D）はダブリン写本を，それぞれ示している。なお，有田豊（2022）.「翻訳 中世ヴァルド派詩編『舟』」,『立命館言語文化研究』, 34（1）, 177. にも同じ表を記載している。

9）中世ヴァルド派の詩に関する基本的な研究は，20 世紀半ばの時点で，次の文献にまとめられている。Armand Hugon, A., & Gonnet, G.（1953）. *Bibliografia valdese*（*Bollettino della Società di Studi Valdesi*, *93*）. Cuneo: Tipografia Subalpina, 104-107.

10）Cf. 有田豊（2018）.「中世ヴァルド派詩篇『崇高なる読誦』の成立時期に関する諸主張」,『Lutèce』, 44, 5-21.

11）Paravy, P.（1993）. *De la Chrétienté romaine à la réforme en Dauphiné : évêques, fidèles et déviants*（*vers 1340 – vers 1530*）. Rome: École française de Rome, 1123-1133.『崇高なる読誦』は，6 行目に作成時期を示すと思しき年代が記されていることや，373 行目付近に「ヴァルド派」を指すと思しき名称 « vaudes » が記されている点において，他の中世ヴァルド派文書にはない具体的な情報が含まれた文書として扱われている。

12）Montet, E.（1888）. *La Noble Leçon, texte original, d'après le manuscrit de Cambridge*. Paris: Librairie G. Fischbacher.

13）Bosio, H.（1885）. La Nobla leyczon considérée au triple point de vue de la doctrine, de la morale et de l'histoire. *Bulletin de la Société d'Histoire Vaudoise*, *2*, 20-36.

14）De Stefano, A.（1909）. *La Noble Leçon des Vaudois du Piémont : Texte critique, introduction et glossaire*. Paris: Honoré Champion.

15）Papini. *op.cit*.

16）Chaytor, H. J.（1930）. *Six Vaudois poems from the Waldensian Mss in the University libraries of Cambridge, Dublin and Geneva*. Cambridge: Cambridge University Press.

17）Vogel. *op.cit*.

18）Papini. *op.cit*. 37-52.

19）ヴァルド派は聖書を極めて重要視しており，「我々は聖書が述べていることを信じねばならない」として，信仰の基盤に「聖書を文字通りに解釈し，実践する」という前提を持っている．Cf. De Stefano. *op.cit*. 6. *La Nobla Leiçon*. « Mas l'escriptura di e nos creyre o deven »（v.19）

20）Vogel. *op.cit*. 138-144.

21）Gonnet., & Molnár. *op.cit*. 329.

22）Vogel. *op.cit*. 141.

23）大貫ほか . 前掲書 . 754. ; 木寺 . 前掲書 . 530, 689. 15 世紀のスコラ学においては，神への愛の有無に基づく「痛悔」と「不完全な痛悔」の議論が注目されていた。「痛悔」とは，神への愛から起こる悔悛の概念で，自分が犯した罪を忌み嫌い，心から悔やみかなしんで，二度とこれを犯さないと決心することを指す。「真の悔悛」ともいう。一方,「不完全な痛悔」とは, 悔悛を行うものの, そこに神への愛はなく, 罰への恐れや罪の醜さの自覚などを動機として，自身の罪を嘆くことを指す。

24）Vogel. *op.cit*. 138-144. を参考に，筆者作成。

25）Montet. *op.cit*. 60, 62. *La Nobla Leyçon*.［病人］は，筆者による付記。

26）Vogel. *op.cit*. 141-142.

27）Montet. *op.cit*. 64. *La Nobla Leyçon*.

28）Cegna, R.（1994）. *Medioevo cristiano e penitenza valdese. Il "Libro espositivo" e il "Tesoro e luce della fede"*. Torino: Claudiana, 143.（*Ms.Ge.l.e.208*, *Ara s'ensec de la penitencia*, 75v）

29）Vogel. *op.cit*. 143-144.

30）Chaytor. *op.cit*. 14. *La Barca*.

31）Balma, G.（1906）. Les poèmes vaudois d'après le manuscrit inédit de Dublin. *Bulletin de la Société d'Histoire Vaudoise*, *23*, 55. *Oraczon*.

32）Chaytor. *op.cit*. 35. *Lo Novel Confort*.

33）Chaytor. *ibid*. 36-37. *Lo Novel Confort*.［多くの人］は，筆者による付記。

34）Chaytor. *ibid*. 43. *Lo Novel Confort*.

35）Chaytor. *ibid*. 45. *Lo Novel Confort*.［高貴なる身分の人々］は，筆者による付記。

36）Chaytor. *ibid*. 56. *Lo Despreczi del Mont*.［現世］は，筆者による付記。

37）Chaytor. *ibid*. 57-58. *Lo Despreczi del Mont*.

38）Gonnet., & Molnár. *op.cit*. 329.

39）Chaytor. *op.cit*. 26. *Lo Novel Sermon*.

40）Chaytor. *ibid*. 54. *Lo Payre Eternal*.

41）『マタイによる福音書』（第 13 章 1-23 節）や『ルカによる福音書』（第 8 章 4-15 節）

42）Vogel. *op.cit*. 144.『舟』と『祈祷』は，中世ヴァルド派において悔悛の儀式の規範が確立されていたことを示しているという。悔悛者の唱えるべき文言を事前に定めていることから，ヴァルド派の詩は一種の典礼書のような印象を与えるものと述べている。

43）「テクスト共同体」とは，ブライアン・ストックが提唱した，中世後期に登場する，ある特定のテクストを思考や行動の規範とする人々の集団である。Cf. Stock, B.（1983）. *The Implications of Literacy: Written Language and Models of Interpretation in the Eleventh and Twelfth Centuries*. Princeton: Princeton University Press, 88-151. 大黒俊二（2010）.『声と文字』, 岩波書店 , 110-112, 201-204.

44）Gonnet, G.（1998）. *Enchiridion Fontium Valdensium II*（*Recueil critique des sources concernant les Vaudois au moyen âge*）. Torino: Claudiana, 114, 118. パッサウ司教区の名もなき修道士が 1260-1266 年頃に記した異端論駁書『反異端ヴァルド派の書』には，「無学な農民がヨブ記を暗記していたり，他にも新約聖書の内容を完璧に知っていたりする人々を何人も見た」,「男女を問わず，（新約聖書の内容を）俗語で暗唱できないものは稀である」という記述がある。

45）Gonnet. *ibid*. 164-165. *Tractatus de inquisitione hereticorum*.

参考文献

Apfelstedt, F.（1880）. Religiöse Dichtungen der Waldenser, Genauer Abdruck der Genfer Hs. 207. 2. La Barca. *Zeitschrift für romanische Philologie*, *4*, 330-337.

Armand Hugon, A., & Gonnet, G.（1953）. *Bibliografia valdese*（*Bollettino della Società di Studi Valdesi*, *93*）. Cuneo: Tipografia Subalpina.

Audisio, G.（2001）. L'organisation de la clandestinité vaudoise. In Audisio, G.（Ed.）, *Religion et exclusion, XIIe-XVIIIe siècle*（61-70）. Aix-en-Provence: Presses de L'Université de Provence.

Balma, G.（1904）. I poemi valdesi. Lo Novel Sermon. La Barca. *Bulletin de la Société d'Histoire Vaudoise*, *21*, 39-61.

Balma, G.（1906）. *La Barca, antico poema valdese*. Firenze: Claudiana.

Balma, G.（1906）. Les poèmes vaudois d'après le manuscrit inédit de Dublin. *Bulletin de la Société d'Histoire*

Vaudoise, *23*, 3-55.

Borghi Cedrini, L., & Giraudo, A.（2022）. Ancient Waldensian Literature. In Benedetti, M., & Cameron, E.（Ed.）, *A Companion to the Waldenses in the Middle Ages*（459-477）. Leiden: Brill.

Bosio, H.（1885）. La Nobla leyczon considérée au triple point de vue de la doctrine, de la morale et de l'histoire. *Bulletin de la Société d'Histoire Vaudoise*, *2*, 20-36.

Cegna, R.（1994）. *Medioevo cristiano e penitenza valdese. Il "Libro espositivo" e il "Tesoro e luce della fede"*. Torino: Claudiana.

Chaytor, H. J.（1930）. *Six Vaudois poems from the Waldensian Mss in the University libraries of Cambridge, Dublin and Geneva*. Cambridge: Cambridge University Press.

Comba, E.（1887）. *Histoire des Vaudois d'Italie depuis leurs origines jusqu'à nos jours*. Paris: Librairie G. Fischbacher.

De Stefano, A.（1909）. *La Noble Leçon des Vaudois du Piémont : Texte critique, introduction et glossaire*. Paris: Honoré Champion.

Gonnet, G., & Molnár, A.（1974）. *Les vaudois au moyen âge*. Torino: Claudiana.

Gonnet, G.（1998）. *Enchiridion Fontium Valdensium II*（*Recueil critique des sources concernant les Vaudois au moyen âge*）. Torino: Claudiana.

Montet, E.（1888）. *La Noble Leçon, texte original, d'après le manuscrit de Cambridge*. Paris: Librairie G. Fischbacher.

Papini, C.（2003）. *La nobile lezione ; La Nobla Leiçon : Poemetto medievale valdese*. Torino: Claudiana.

Paravy, P.（1993）. *De la Chrétienté romaine à la réforme en Dauphiné : évêques, fidèles et déviants*（*vers 1340 – vers 1530*）. Rome: École française de Rome.

Stock, B.（1983）. *The Implications of Literacy: Written Language and Models of Interpretation in the Eleventh and Twelfth Centuries*. Princeton: Princeton University Press.

Vogel, L.（2018）. A Noble Lesson: The Poems of the Early 16th Century Waldensian Manuscripts. In Nicák, M.（Ed.）, *Poetry and theology*（127-145）. Jihlava: Jan Keřkovský.

Todd, J. H.（1865）. *The Books of the Vaudois: The Waldensian Manuscripts Preserved in the Library of Trinity College*, *Dublin*. London: Macmillan and Co.

有田豊（2018）.「中世ヴァルド派詩篇『崇高なる読誦』の成立時期に関する諸主張」,『Lutèce』, 44, 5-21.

有田豊（2022）.「翻訳 中世ヴァルド派詩編『舟』」,『立命館言語文化研究』, 34（1）, 175-195.

大黒俊二（2010）.『声と文字』, 岩波書店.

大貫隆ほか編（2008）.『岩波キリスト教辞典』, 岩波書店.

木寺廉太訳（2017）.『オックスフォード キリスト教辞典』, 教文館.